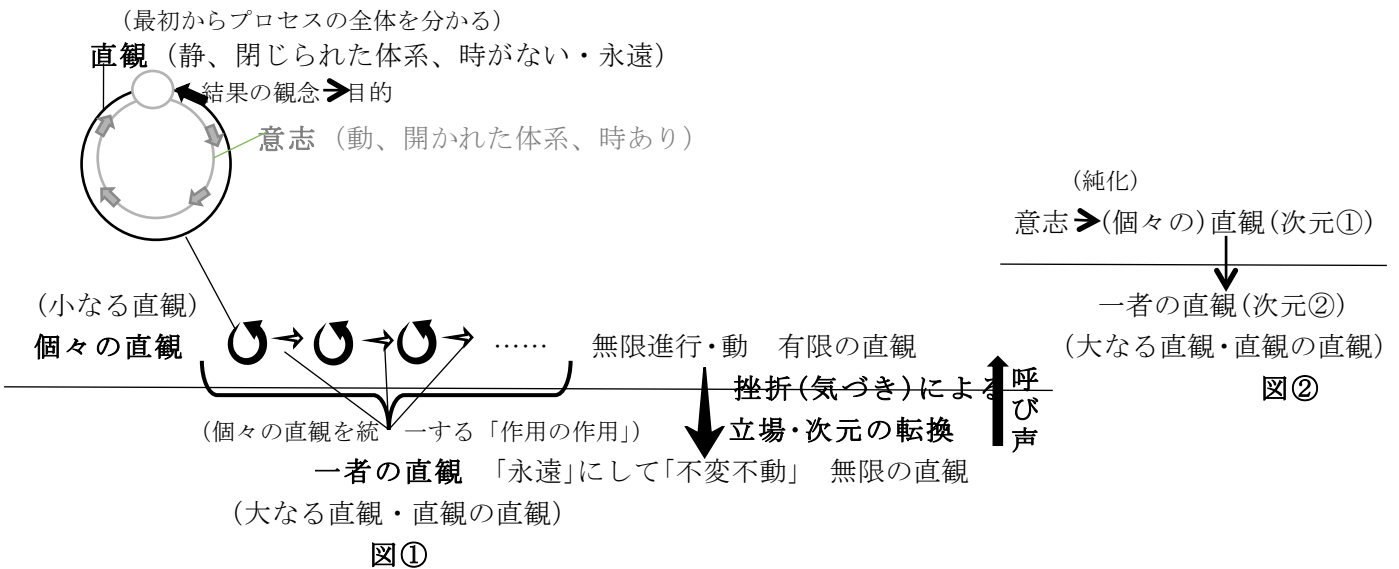


### 1. 前回の哲学的問い (From Kuwahara)

人生への気づき (「直観」) を得た瞬間、即ち西田のいう「作用が作用の立場に於て反省せられた時」、「直観を無限に統一するもの」である「直観の直観」としての「一者」と接続し、その瞬間だけは、一者と合一し得ているのだろうか?

問いを解明するためにテキスト「直観と意志」46 頁後ろから二行目「閉ぢられた体系の中」～47 頁の終わりまで再読し、二つ次元が異なった直観即ち (個々の) 直観とそれの背後に働き、然もそれを統一する大なる直観・一者の直観があることを確認した。意志と直観、個々の直観と一者の直観との関係を図①のように示されている。



図②に示されるように、意志は「純化する」と「直観」となるのである。即ち「意志の形」において、「欲望」が「満足せられる」時、「終が始と結合する時」、「精神的なものが自己自身 (或いは「作用が作用自身」) に還り、「自己自身を直観する」ということができるのである、言い換えれば「意志」が自覚した時、「直観」となるのである。しかるに、「作用が作用自身を直観する」ことは「作用 (精神) の上にあるものを見る」のであり、「作用の作用の立場 (一者の立場) に於てでなければならない」。我々はいつも「思惟を以て」、物事を対象化し「自己の中に見る」傾向があるので、この小なる自己をもって、自己の「上にある」「無限なる作用の不変不動なる統一」即ち「一者」を真に「受け止めて見る」ことができない、「作用の統一という時、我々は直ちに静止せる一つの統一を考える」からである。そのゆえ、この小なる自己の発展、意志の満足への追求はどこまでも終わることがない。しかるに、我々の小なる自己は一者と全く質的には違ったものではない。したがって、(個々の) 直観と一者の直観との間に、非連続の連続があり、そこには立場の転換がなければならないと考えられる。小なる自己は自己存在を「永遠なる時の流れに流れて行く」と考え、自己存在の虚しさに絶望するとき、この自己が死んで、一者からの呼び声を聞くことができ、一者に還ることができると考えられる。言い換えれば、個々の直観は自己の絶対否定によって一者の直観に転ずるのである。

### 2. 新しい方が入ったため、ここまでの概観を復習した。

### 3. テキスト

「物理現象の背後にあるもの」一の 43 頁の「物理学」から 44 頁の二行目「明せられるのである」までを読む。ここには、二つ種類の物理学が並んでいる。一つは個物を基本的に考え、力を個物に属するとする遠隔作用の物理学であり、もう一つは空間を基本的に考え、力を空間に属するとする近接作用の物理学である。

### 4. 哲学的問い

宇宙の根底たる一大知的直観・作用の作用としての一者と冥合し得たとき、我々が真の自己を知ることができる、即ち自己の自覚が成立すると考えられる。こうして、我々の自覚は一者の自覚によるによって成立すると言えるのか。両者はどんな関係にあるのか。

